【 From Kobe　2015 年 12 月　】

From Kobe2015
12.

2015 年　師走の便り　　≪格差を縮める社会の実現を≫

1. 2015 年　師走の便り　　クリスマス ＆ ルミナリエに思う
2 .沖縄の思いに耳を傾けよう　　東京･一極集中の弊害が露骨に
沖縄普天間基地移設工事に関する沖縄県と国との法廷闘争
3.　シリコンバレーに見るすさまじい格差社会の現実

≪1.　2015 年　師走の便り　　クリスマス ＆ ルミナリエに思う ≫

毎年　12 月になると　今年一年をあれこれ思い浮かべながら　「仲間の元気を活力に!!」とクリスマスカードを作ります。
グローバル・高度情報化社会と日本の成長繁栄が声高に叫けばれる今、なにか　満たされぬ閉塞感から脱する新しい道を今踏み出さねば・・・・・・と。

人間の人間たる所以は「他人を思いやる心」。人は心を許す仲間なくして生き延びてはこれなかった。
それを「愛」という人もいる。 今　厳しい競争社会の中で　それが大きく揺らぎ、忘れ去られてきた。

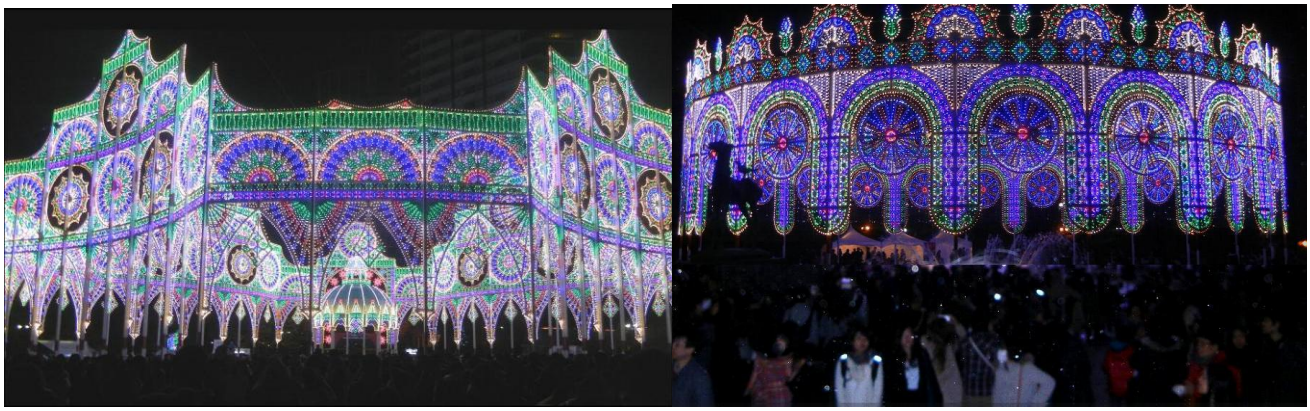
グローバル・高度情報化社会繁栄の流れの中で、地球温暖化はもう抜き差しならぬ状況になり、
極端な格差社会が新興国のみならず、先進国でも軒並み　貧困差別と争いを引き起こしている。
これが人類が追い続ける未来繁栄の道なのだろうか???
日本では　東京一極集中が抜き差しならぬ状況の中　いまだにそれを追い続ける日本。

「一億総活躍社会」の掛け声にも首をかしげたくなる未来不安の世相が蔓延する。
今　出口を見致す転換をしないと人類・地球滅亡への道の縁にいる。
「他人を思いやる心」を新しい価値観と考える人も増えつつある。　これを次の世代へ伝えねば。。。。。。。
人類の歴史の中で　他に類を見ない１万年という長きにわたる争いのない平和な継続社会「縄文」を築いた日本。
今　こそ　「日本人のルーツ　心優しき縄文人」　の心と知恵を取り戻そう。
神戸では　今年も　未曽有の震災の中で培割れた人と人とのつながりの証し「ルミナリエの灯」が灯りました。
心を許す仲間なくして生き延びてはこれなかった人類。　その繁栄の道はただ一つ「他人を思いやる心」。
今一度　家族・仲間を　そして世界平和の道を思い浮かべながら、今を生きたいと願っています。
そんな思いを込めた 2015 年クリスマス
知人の家のクリスマス飾りが素晴らしく、今年はそれをカードに使わせていただきました。
ルミナリエも　例年とは違った LED の光の色合に　20 年を超えた時代の流れを感じています。
お互い　無理せず　元気に　前向いてと。

2015.12.10.　　Mutsu Nakanishi　from Kobe

神戸ルミナリエの光の環の中で　縄文の心の環を見る

絶やすまい忘れまい希望の灯　神戸ルミナリエ



世界に類のない一万年も平和で豊かな生活が続いた日本の「縄文」
そのエンジンは「他人を思いやる心」
北東北･北海道の縄文遺跡を　ユネスコ世界遺産に

今年もルミナリエの灯が神戸に灯った。　震災から２ッてています。１年　鎮魂から未来希望の光の環へ
ルミナリエの光の環の中に入って、この環は縄文のストーンサークルの現代版だと。
世界に類のない一万年もの長きに平和で豊かな生活を持続させた縄文　その原動力は「他人を思いやる心」。
今　世界でも、日本の縄文時代の再評価が始まっている。 神戸　ルミナリエのテーマも同じではないか・・・・
欲望・競争の渦から抜け出し、希望の未来へ
「他人を思いやる心」　「日本人のルーツ　心優しき縄文人」　の心を今取り戻そう。

≪2.　沖縄の思いに耳を傾けよう　東京･一極集中の弊害が露骨に　≫

神戸新聞の社説に沖縄普天間基地移設工事に関する沖縄県と国との法廷闘争に関して　翁長沖縄県知事の意見陳述の内容についてのコメントが掲載されていた。

国と地方の関係について、　これほど地方を無視した対応はかつてないく、「中央のおごり」とでもいうべき態度と対応に

中央の「村社会」復活　村八分的な格差社会がますます露骨になっている一番の例のように見える。

すぐに民意・多数決の原則を振りかざす中央の民主主義が本物なのかどうか・・一度　よく考えねば…・・

一方　国際・グローバルの最先端を行くアメリカ　シリコンバレーでは

目を覆うばかりの格差社会が出現すると同時にグローバル企業の横暴が目に余り、

「グローバル企業の論理は決して住民を幸福にはしない」との現実に直面しているとのニュースを見た。

あの IT 先端産業が国の繁栄を引っ張ったシリコンバレーでは　今グローバル化・国際化し、繁栄を謳歌する大企業群によって街は著しい格差・村社会の現実にさらされ、大多数の住民が取り残され、幸福を教授できない状況が現実に見えだしていると…・・。大きな格差社会を生み出したグローバル化・国際化が、本当に人々を幸福に導くのか?

今アメリカ社会は　危機に直面していると…・・。

これは　さらには　アメリカ一辺倒の日本の未来をこのシリコンバれーの現実が示唆しているように見える。

年寄りのたわごとかもしれませんが、　今は　本当に数にものをいわした薄っぺらなご都合主義的判断が、主流に見えて仕方がない。日本でも　一度立ち止まって　じっくり考えることが必要ではないかと

by　Mutsu Nakanishi

神戸新聞の社説岸記事　翁長知事陳述／国民全てへの問い掛けだ

米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移設計画をめぐる、国と県による異例の法廷闘争が始まった。

移設先の名護市辺野古の埋め立て承認を取り消した翁長（おなが）雄志知事による処分について、

国が撤回を求めた代執行訴訟の第１回口頭弁論が、福岡高裁那覇支部で開かれた。

訴訟で争われるのは知事による取り消し処分の是非である。安全保障や外交分野で、知事に判断権があるのかどうかも争点だ。

だが、法廷で意見陳述した知事が重きを置いたのは、国が掲げる法律論ではなく、「魂の飢餓感」と表現する沖縄の心情だった。国土のわずか０・６％に７３・８％の米軍専用施設が集中している。過重な基地負担を強いられてきた歴史をたどりながら、地元民意に反して進められようとする辺野古移設の不条理を訴えた。

裁判の原告である国だけに向けられたものではない。国民全てに対する問い掛けと受け止めるべきだ。

私たち一人一人が、沖縄の声にしっかりと耳を傾け、解決への道筋を考えることが重要だ。

訴訟で県側は移設を憲法違反と位置付ける新たな論点も持ち出した。

移設先周辺の住民の自治権が大幅に制約されるにもかかわらず、地元の承認も国会審議もなしに計画を進めるのは、憲法が定める地方自治の原則に反するとの主張だ。

複数の選挙で反対の民意が示されたにもかかわらず、国が強硬に進める辺野古移設を、翁長知事は地方自治の危機と訴えてきた。沖縄だけの問題ではないと他の自治体の理解を求めてきた。しかし、わがこととして考えた自治体はどれほどあったか。国が進める事業を止められるわけがない、という姿勢では、自治権が揺らぐのを傍観することになる。

１９９９年の地方自治法改正で、国と地方の関係は「上下・主従」から「対等・協力」へと変わった。

「日本に地方自治や民主主義は存在するのか」という知事の問い掛けを、正面から受け止める必要がある。

菅義偉官房長官は「対話の余地がなかった」とし、やむを得ず訴訟に踏み切ったと強調する。

しかし、県との接点を見いだせず、解決を図れなかった責任は重い。

国は対話による解決を望む世論に応え、事態を打開する努力を続けるべきだ。

格差対立、第２機械時代の痛みに直面するシリコンバレー　　インターネットの記事より

1. シリコンバレーの現実　　彼らが日本で豪遊できるワケ「1900 円のランチ？安いね」の現実

最近は、シリコンバレーからの人と会うことが多い。彼らは、日本はお気に入りで、大満足して帰っていく。
というのも、安いからだ。

先日は、ランチミーティングをした。丸の内のいわゆるちょっと高級ランチゾーンのお店にいった。最低の値段が 1500 円～、といった感じのレストランだ。日本は、だいたい「半額」。もうすぐランチタイム
彼はメニューを見るなり、とても安いといって、1900 円のセットを頼んだ。我々にとっては、それなりに高いランチだ。
「日本は、素晴らしい。この内装、雰囲気で、ちゃんとしたサービスがついていて、チップもないし、それでいて、15 ドルちょっと（1900 円のこと）だし」 シリコンバレーでこんな感じだといくらするの？と聞き返してみた。「そうだな、30 ドルは最低でもかかるな。ドリンクやチップは別だし」だという。
ドリンクと、20%のチップ、8%前後の消費税をくわえると、4500 円くらいになると思う。ランチに 4500 円である。
「もちろん、物価の高さはクレージーだけれどもね。ミーティングのために入ったホテルのスムージーが、なんと 23 ドルだったんだ」　（同様にチップ税金をいれたら 3500 円くらいになると思う）
シリコンバレーの物価のあまりの高さには、彼も辟易としているようではあったが、実際そうなのだからしょうがない。
そして、日本は、だいたい「半額」という感じの捉え方のようだ。　日本が半額、これは衝撃的だ。

こんなことが　一般住民から切り離されたシリコンバレーの村社会の中では普通なのだ。
村から締め出された大多数の人たちの現実　　「明日は我が身」がふと頭をよぎる。。。。。

2.　格差対立、第２機械時代の痛みに直面するシリコンバレー　　インターネットの記事より

下の写真は、シリコンバレーのマウンテンビュー駅(カリフォルニア州)の裏側にある建物だ。
2 月に WhatsApp の Jan Koum 氏(CEO)が Facebook への売却(190 億ドル)に合意した際、契約書にサインした場所である。

母親と共にウクライナから移住してきた Koum 氏は、生活保護のフードスタンプを受給できるほど苦しい生活を送っていた。　床掃除の仕事などをしながら、独学でコンピュータネットワーキングを習得し、そしてアルバイトのセキュリティ検査で Yahoo!を訪れた時に知り合った Brian Acton 氏と WhatsApp を作り上げた。
契約書にサインするために選んだ建物は、かつてフードスタンプを受け取るために通った社会福祉事務所だった。

契約の様子を伝えた Business Insider は「WhatsApp の CEO が 19 億ドルの Facebook との契約に署名した場所が示す到達点の高さ」という見出しを付けた。
この記事を読んだ人は、シリコンバレーにアメリカンドリームの可能性を感じるかもしれない。
でも、地元の人たちはこのエピソードからアメリカンドリームが難しくなった"今"を思わずにはいられない。
Koum 氏がティーンエイジャーだった頃のマウンテンビューはパロアルトやスタンフォード、サンノゼの間にあるシリコンバレーのすき間の街で、アイディアで勝負するスタートアップが最初のオフィスを構えるのに適した街だった。
ところが Google 本社の城下町として発展し始めてから庶民色は霧散し、今では平均的なアパートの家賃が 2000 ドルを超える。
空き物件に入居するのは Google や Microsoft、Symantec など IT 大手の社員ばかり。

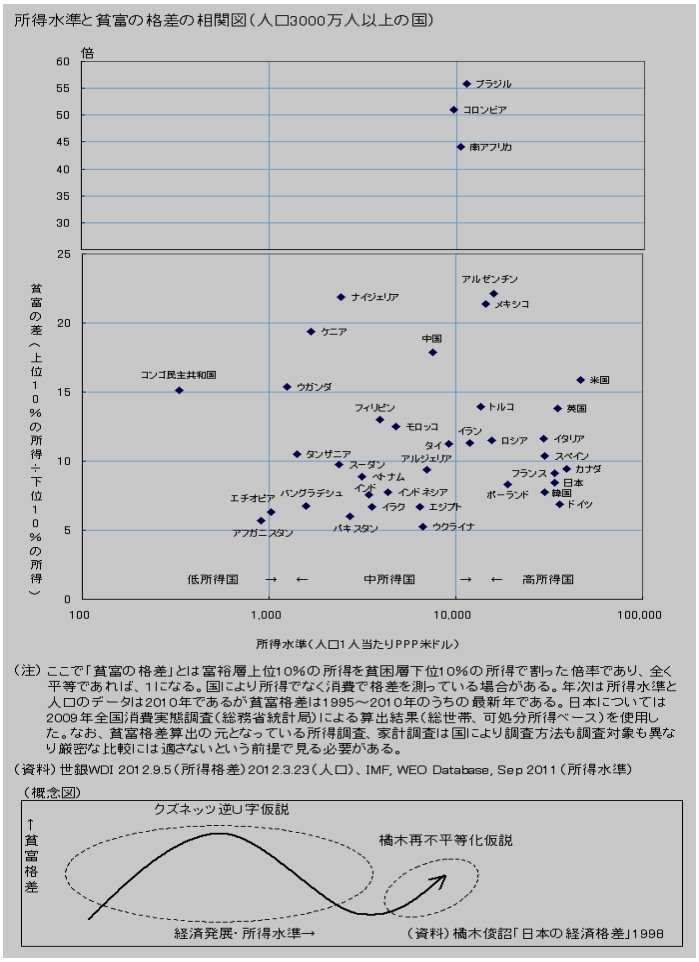
テクノロジー産業に関わっていない人、所得が多くはない人たちが街から出て行き、持ち味だった多様性が失われようとしている。それはマウンテンビューだけではなく、シリコンバレー全体、そしてサンフランシスコに及ぶ傾向でもある。
家賃の急上昇に怒る住民が、高所得者層として流入してくるテクノロジ企業社員の通勤専用バスを取り囲んで抗議を行っていることを昨年末に紹介した。その後、市が通勤バスの規制に乗り出し、公共の停留所の使用に料金を徴収するようになった。それによって渋滞はいくらか緩和されたものの、根本的な原因である格差対立の溝は埋まっていない。
むしろ、悪化している。
先週末、Digg の共同設立者の 1 人で、現在は Google Venture のパートナーを務めている Kevin Rose 氏のサンフランシスコの自宅前に抗議団体が現れた。個人にまで怒りの矛先が向けられるようになったのが現状である。

第 2 の機械による産業革命

シリコンバレーの格差対立は、テクノロジー産業の富が集中するシリコンバレーのローカル問題として報じられている。
でも、決して対岸の火事ではない。米国のみならず、世界の他の都市でも将来に起こり得る問題だ。
それを示すのが、1 月に刊行されて話題になった「The Second Machine Age（第 2 機械時代）」である。
著者の Erik Brynjolfsson 氏と Andrew McAfee 氏は、機械の知力が飛躍的に向上し、肉体労働だけではなく、知力を使う仕事も次第に機械が担うようになると予測する。それによって社会インフラが新たな次元へと進み、我々は社会、テクノロジー、そして経済の成長に対する見方を根本から改めざるを得なくなる。

「弁護士からトラック運転手まで、全ての職業に影響が及ぶだろう。企業は変化しなければ、衰退を強いられる。すでに、このシフトの影響が最近の経済指標から読み取れる。労働に従事する人が減少し、生産性や利益は向上しているのに賃金は減少している」

起業家やイノベータ、プログラマや機械いじりが好きな人、科学者、デザイナーなど、色んなタイプのギークが第 2 機械時代への変化の中で自分の力を発揮できる可能性がある。反面、"勝者総取り"の傾向が強まり、第 2 機械時代に大きな成功をつかめる層は今よりも小規模なグループに限られる。

中間層は第 2 機械との競争に直面し、最下位の人たちの生活は一段と悪化、格差対立が深まる可能性をはらんでいる。

これを読んで思った。
今のシリコンバレーやサンフランシスコが抱える問題は、まさにこれではないかと。
シリコンバレーでも第 2 の機械に仕事を任せるような状況にはなっていないものの、IT・テクノロジーに関わる企業やスタートアップの集積地であり、テクノロジー産業を中心に雇用やビジネスが動くシリコンバレーの経済は、第 2 機械時代の経済に近い。社会が第 2 機械時代に移り始めた時のような痛みが、どこよりも早くもあらわれても不思議ではない。第 2 機械時代への移行をスムースに成功させるためのカギの 1 つとして、Brynjolfsson 氏と McAfee 氏は教育改革の必要性を挙げる。第 2 の機械の膨大な処理能力と人間の知恵を組み合わせた新たなコラボレーションを生み出し、社会の大きな変化に自分の存在価値を見いだせる第 2 機械世代の育成である。
でも、現実はそれほど単純ではない。テクノロジと共にあるアイディアを持った人材に富み、自由な気風のシリコンバレーですら、大きな変化に苛立つ人たちとの軋轢が深刻化の一途である。
第 2 機械時代への移行を進めるシリコンバレーの英知が足下の問題の解決に手をこまねいていることに、我々がいずれ向かうであろう第 2 機械時代の課題の大きさがあらわれている。